〔研究論文〕

縄文時代中期終末期における集落の様相

—千葉市すすき山遺跡を中心として—

横　田　正　美

1、はじめに

昭和44年に調査されたすすき山遺跡は、縄文中期終末期のみの単純遺跡である。縄文時代中期終末期は縄文時代の変遷過程のうえで後期へと移る大きな変動期であったといえるだろう。それまで各地域ごとの独自の構造と変化の方向性をもっていた土器が、この時期になるとそれらが失なわれ斉一性の強いものとなる。また中期末葉から後期初頭にかけての短期間しか継続しない集落が多く存在したことなどその例をあげることができよう。

そこで、縄文時代中期終末期の単純遺跡である「すすき山」をもとに、この縄文時代中期終末期について考えてみたい。

2．すすき山遺跡の概要

すすき山遺跡は千葉市源町字すすき山に所在する(第1図)。すすき山遺跡は、都川と合流し東京湾に流入するよし川の支谷に面した台地上に位置する。この台地は、北側および南側に小さな谷頭があり、東西220m、南北150～170m、先端がやや扇状に開いた形をした1つの独立した舌状台地をなしている。この台上のほぼ全域に遺跡は展開するが、縄文時代中期の集落は、この台地の基部近くに偏在している。台上の標高28m前後、水田との比高は12mをはかる。

また、この台地の周辺には縄文時代はもとより各時代の数多くの遺跡が集中している。縄文時代の遺跡では、前期に属する紅嶽台から、西寺山、餅が崎、廿五里北、廿五里、殿台、殿台前、東寺山など貝塚を伴う遺跡がある。なかでも廿五里北貝塚や廿五里貝塚のような100mクラスの環状貝塚が存在し、東寺山貝塚、殿台貝塚と合わせると同一台地上に大貝塚がほぼ同時期に存在したことになる。これは、貝塚町に存在する台門、荒屋敷、草刈場、草刈場南、荒屋敷北、荒屋敷東などの貝塚群に匹敵するほどの密集地域である。弥生時代の遺跡では、わずかに渡戸台遺跡が知られているだけだが、古墳時代になると遺跡数が増加し、集落址では、石神、殿山、西前原、稲毛台などがあり、古墳では、石神、戸張作、駒形、蓮台場、浅間などの古墳群がある。

このように、すすき山遺跡周辺には数多くの遺跡が集中し、千葉市内でも最も集中している地域であると言え、この地域が各時代を通して重要な位置を占めていたと言えるだろう。しかし近年の団地造成等の行為により調査もされずに消滅してしまった遺跡も数多い。これらの遺跡の中で、縄文時代の遺跡で特に注目されることは、東寺山台地の西側と東側の遺跡で性格を異にしていることである。つまり西側では貝塚を伴うものが少なく、東側では大型の貝塚を形成するということである。このことは、この地域の歴史的な意義を探るうえで留意しなければならないことであろう。

昭和44年に、加曽利貝塚博物館に依って発掘調査がおこなわれ、台地東半部において10基の方形周溝状遺構（遺構内から発見された土師器および須恵器片から、国分期に属すると推定される）10基、縄文時代中期末に属する住居址11基、および11基以上の小竪穴が発見された。

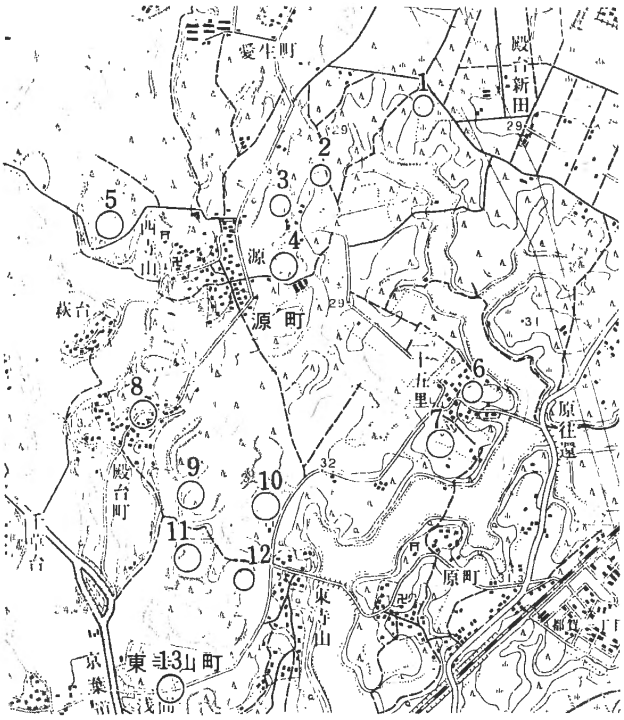
3．出土土器について

すすき山遺跡出土の土器はすべて縄文時代中期末期である（第2図)。貝塚博物館紀要の報告の中で、これらの土器はキャリパー形を呈する深鉢形と胴部の膨らんだ浅鉢形とに形態を2大別し、さらに文様別に5類に分類している。この文様別5分類は、次のとおりである。

1類・縄文地に微隆帯による懸垂状区画文を配し、その内部をすり消したもの（第2図2・8・10)。

2類・沈線によるすり消縄文を配したもの（第

第１図すすき山遺跡と周辺の遺跡



1．紅嶽台遺跡
2．北前原遺跡
3．西寺山貝塚
4．すすき山遺跡
5．餅ヶ崎遺跡
6．廿五里北貝塚
7．廿五里南貝塚
8．殿台貝塚
9．殿台前貝塚
10．東寺山貝塚
11．稲城台遺跡
12．東寺山遺跡
13．戸張作古墳群

２図３・９・11)。

３類・縄文装飾のみのもの（第２図４～６)。

４類・微隆帯文のみのもの（第２図１)。

５類・無文土器（第２図７)。なおこれにはさらに列点文や瘤状突起が組み合わされる。

これらの土器のうち、１・３・７・９・10・11は住居址内出土の土器である。

１は、No.８号住居址内より出土した小型の注口土器で、文様は断面三角形の微隆起線による曲線文を主体とする。口縁部と胴部には横位の無文帯がある。

３は、No.６号住居址内覆土より出土したものである。２類に属し、口縁部に細かい列点が附されている。

９・10・11は、No.11号住居址床面直上より出土したものである。９は、２類に属し太い沈線によって地文の縄文を方形窓枠状に区画し、窓枠部分を帯状にすり消して縄文施文部分が方形になるような効果を上げている。10は、１類に属し４単位の波状口縁を有する。胴部文様は微隆帯によって区画された懸垂状文の内部をすり消したものである。11は、２類に属し口縁部が外反せず、ほぼ直口で、胴部のくびれも少ない深鉢形を呈する。沈線区画された長円形の内部をすり消した無文帯を縦・横に十文字形に組み合わせた文様帯により構成される。

７は、DⅦ区－12Gの住居址（報告には住居址番号が記されていないが、遺構分布図およびグリッド設定図から考え合わすと２号住居址に当てはまるのだろうか）の覆土第１層より出土したものである。口縁部の大きく内曲する浅鉢形土器で、口縁部下に丸味をおびた隆帯がある。

以上が住居址内出土の土器である。他に２・４・５・６・８の土器が報告されている。

２は、キャリパー形深鉢で口縁部を巡る微隆起線上にも胴部と同じ縄文が施されている。

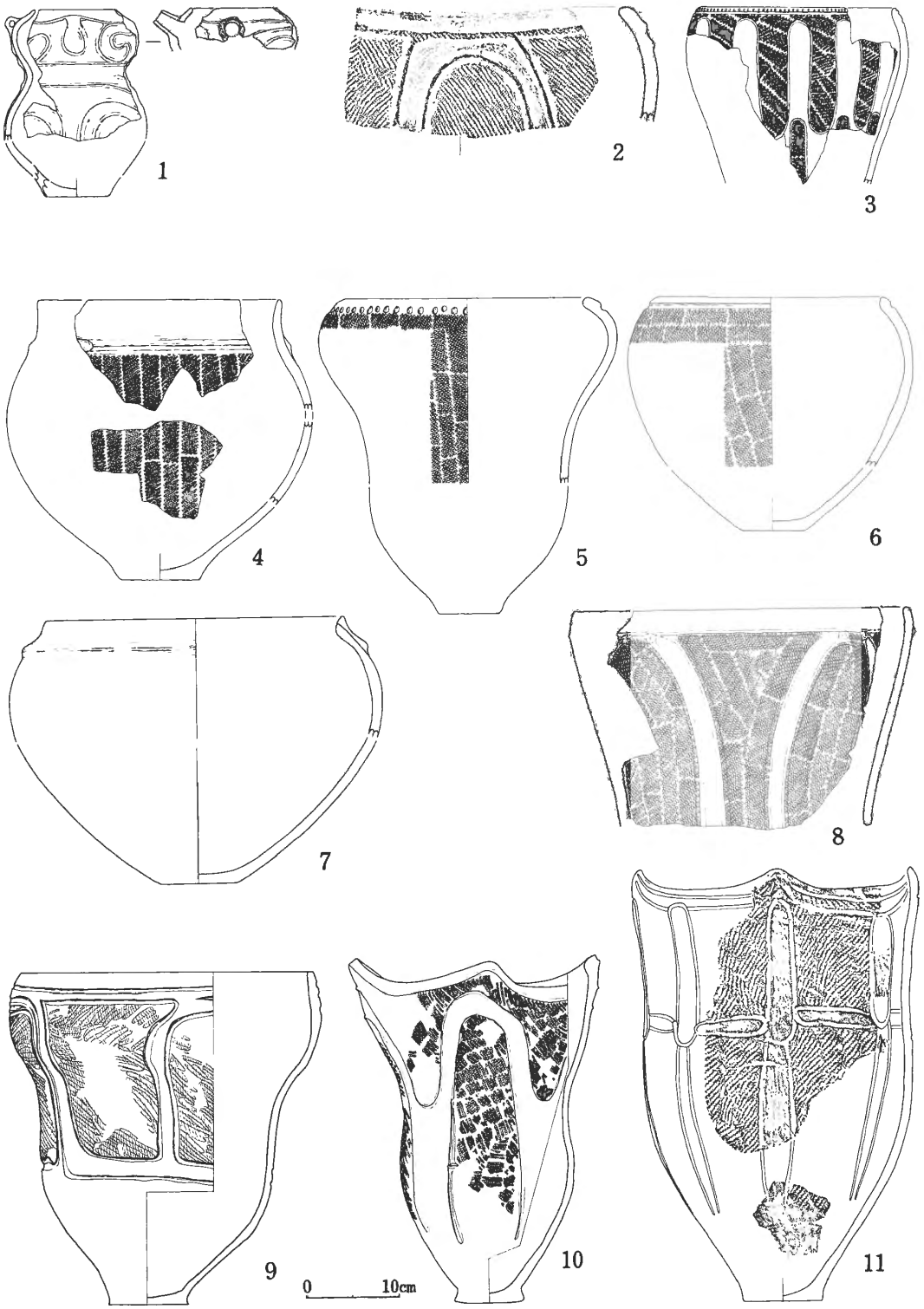
４は、口縁部の無文帯と胴部縄文との境に一条の隆帯が巡っている。

５は、口縁直下に太めの列点文が施される。

６は、口縁直下に太めの沈線が巡っている。

８は、口縁から胴部へ向うすり消縄文による懸垂帯は口縁部直下の瘤状突起によって区切られ、連結しない。

以上がすすき山遺跡のおもな出土土器の説明で



第２図　千葉市すすき山遺跡出土の土器(『貝塚博物館紀要第５号』1972より)

ある。これらは報告では加曽利EⅢ式期に属するとなっている。しかし、微隆起線による文様区画を持つ磨消縄文土器が見うけられる。所謂加曽利EⅥ式とされる一連のものである。現在、縄文時代中期に属する加曽利E式土器の細分、特に加曽利E式の中でも終末期の土器について加曽利EⅣ式の設定をめぐって様々な意見が対立している。

この型式名は神奈川県吉井城山貝塚の報文中に上部貝層（新）出土の土器をとりあげ、「加曽利EⅢ式土器につづくもの」で「加曽利E式と称名寺式とのあいだ」を埋めるものではないかと論述したことに起源がもとめられるものであり、茨城県岩坪貝塚の報告で、B類とC類の一部の土器に加曽利EⅥ式の呼称を与えたことによるものである。以来、この加層利E式土器の細分をめぐって前述したように様々な意見が出され、論議されているのであるが(註1)、最近では加曽利EⅣ式期の遺跡数が増加し、それに伴なう資料の増加によりこの加曽利EⅣ式も編年的位置を確立したといっても差し支えないだろう。

そこで、ここでは加曽利EⅢ式・EⅣ式をあきらかにし、すすき山遺跡出土の土器について検討してみたい（註2）。

加曽利EⅢ式期（第3図）

該期は、口縁部文様帯が崩れ、胴部磨消文帯がせり上ってくる時期である。また、胴部磨消文帯が逆U字状を呈するものもある。

1・2は、渦巻文が流れ懸垂文と一体化したもので、胴部に波状沈線が施されたものである。

3は、口縁部文様帯にU字状の文様が施されたもので、文様内部にS字状の沈線が施されたものである。

4は、沈線文によって口辺帯を区画したもので円形・楕円形を呈す。胴部は平行沈線が施されたものである。

5は、胴部文様帯に逆U字状の磨消文帯が施されたものである。

6は、口縁部文様帯が消失したもので、口縁部を巡る平行沈線間に円形刺突文とキザミ目が交互に施されたもの。胴部は平行垂線による磨消縄文帯が施されたものである。

加曽利EⅣ式期（第4図）

該期は、口縁部文様帯の喪失したもので、微隆起線による文様区画をもつものと、沈線による文様区画をもつものである。器形が波状を呈するものには、橋状の把手がつけられるものも多い。

1は、口縁部は沈線によって無文帯が区画される。U字状・逆U字状の文様を配した土器で、文様区画は沈線で施される。

2は、微隆起帯を使用し、U字状・逆U字状・楕円状の文様が施されたものである。口縁部は微隆起帯によって無文帯が区画されるものである。

3は、口縁が波状を呈する。口縁部から胴下半にかけて微隆起帯による文様が配されている。口縁部には微隆起帯によって無文帯が区画され、無文帯は波状口縁の頂部で互いに接する。無文帯の下側には波状口縁の頂部から開始される逆U字状の文様と、谷部に位置するU字状の文様が施される。これらは沈線によって区画され、内部に縄文が施文される。

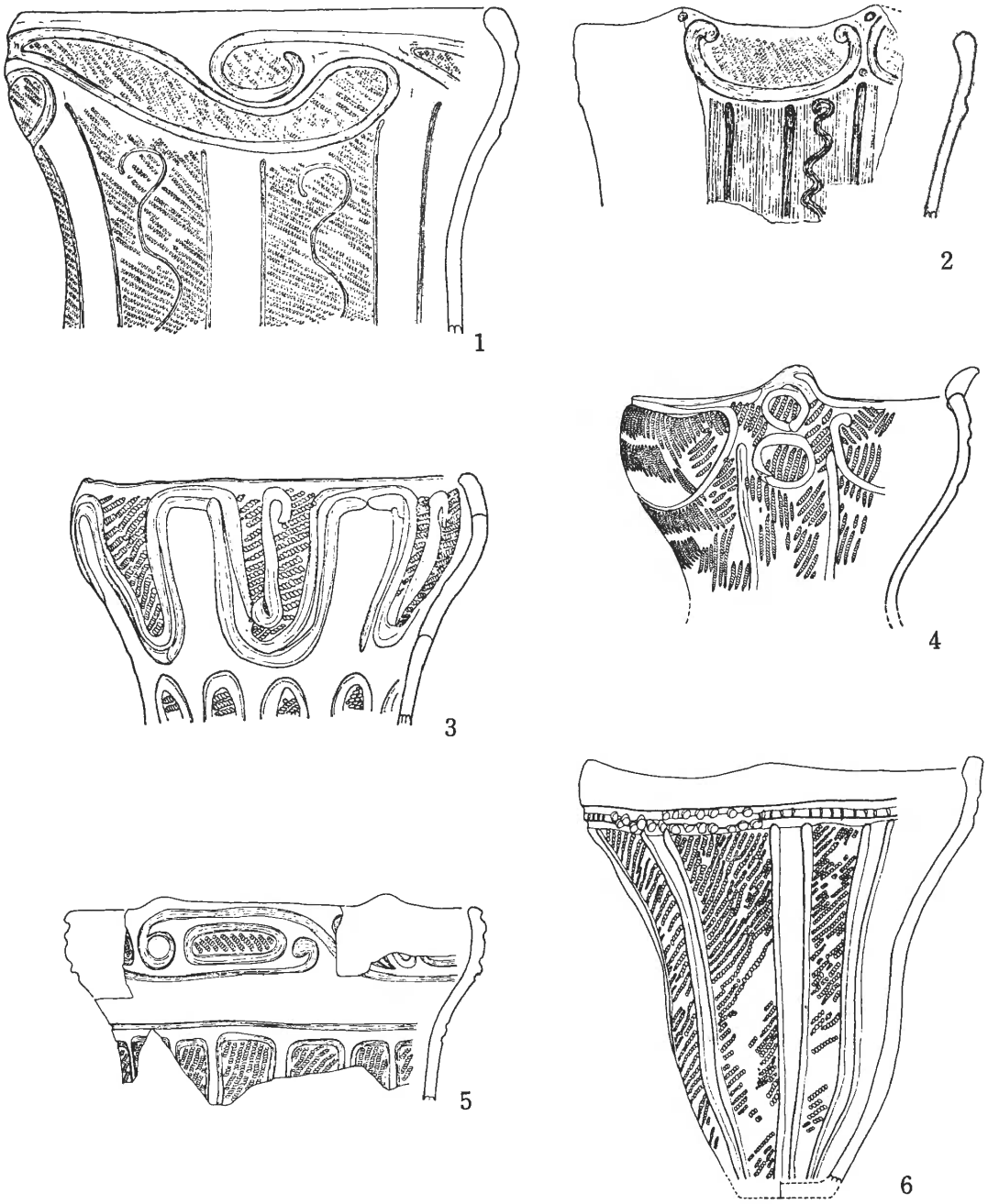
4は、橋状把手が付されたものである。口縁部にU字状の文様を配し、この間に逆U字状の文様を施したもので、逆U字状の文様は口縁部から胴下半にかけて長く配される。文様区画は微隆起帯を使用している。

この他に、口縁下に微隆起帯か沈線を巡し口縁部無文帯を施し、以下縄文を施すものや、逆三角形（鋸歯状）となった区画内に縄文を施したものもある。

以上、加曽利EⅢ式・EⅣ式を県内出土の土器を通して捉えてみた。既報のもの全部に例をあたった訳ではないので必ずしも十分であるとは言えないが、加層利EⅢ式からEⅣ式へと移る流れは胴部文様帯の拡大化により口縁部文様帯を退化させていくということが言えるだろう。

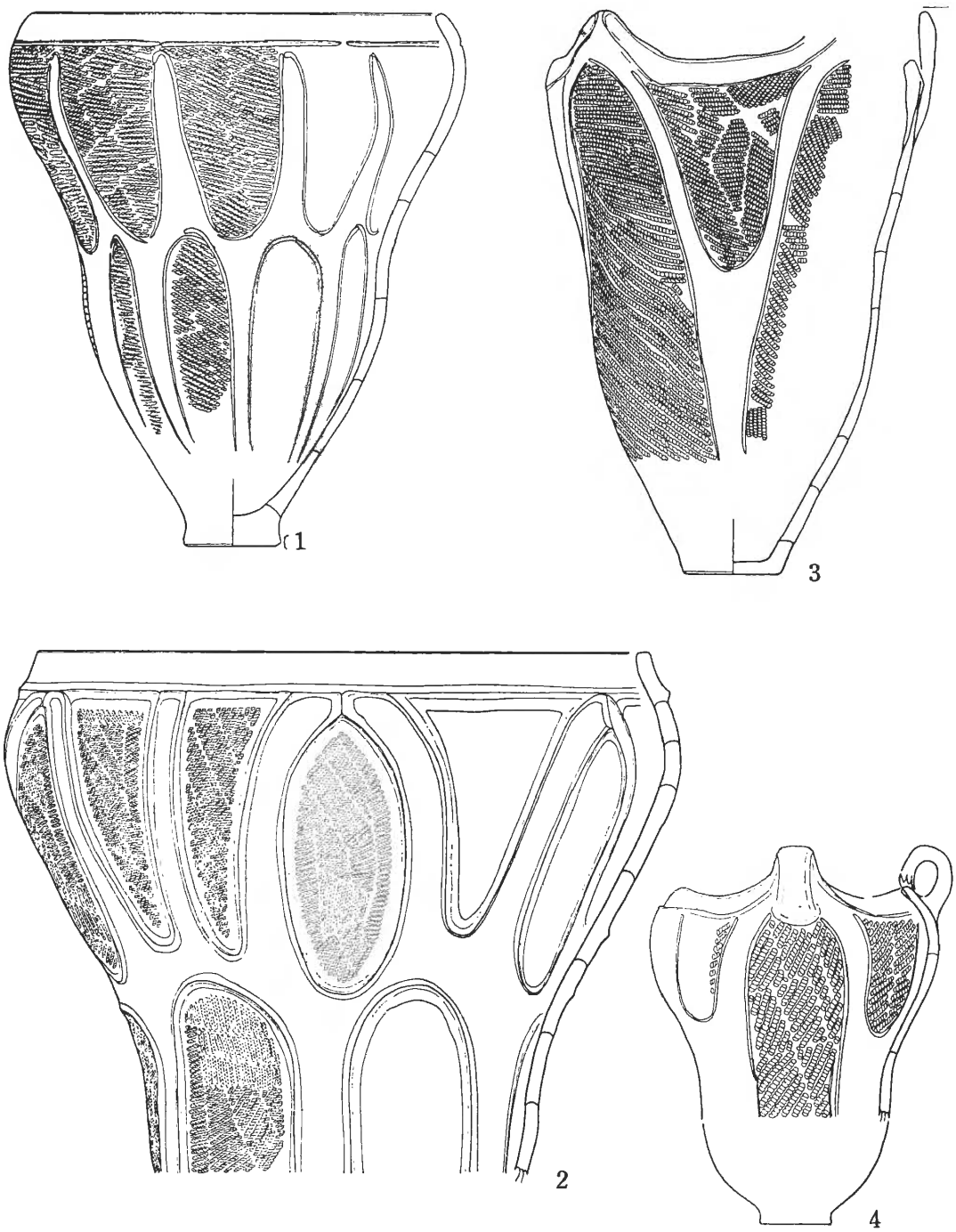
また、第4図－3の土器は、栃木県槻沢遺跡・茨城県岩坪遺跡・群馬県梨ノ木遺跡・埼玉県田端前遺跡5住、志久遺跡8住・神奈川県当麻遺跡、など、関東地方各地に存在している。同様に、第4図－1・2の土器の類型もほぼ関東地方各地に存在している。このように、加曽利EⅢ式からEⅣ式への移行は、各地域独自の文様や器形が、それぞれのつり合いを失い、斉一性の強いものになったものといえる。

以上、加曽利EⅢ式・EⅣ式の説明および、それらの土器説明である。これらをもとに、すすき



第３図　加曽利ＥⅢ式土器　　１、２、松戸市貝ノ花貝塚　　３、千葉市中野僧御堂遺跡

４、佐倉市生谷境堀遺跡　　５、松戸市子和清水貝塚　６、千葉市加曽利貝塚



第４図　加曽利ＥⅥ式土器（『千葉市中野僧御堂遺跡』1976より）

山遺跡出土の土器を再考してみたい。（第２図）

すすき山遺跡出土の土器は、先に書いたとおり１類・縄文地に微隆帯による懸垂状区画文を配しその内部をすり消したもの。２類・沈線によるすり消縄文を配したもの。３類・縄文装飾のみのもの。４類・微隆帯のみのもの。５類・無文のみのもの。と、５類に分類される。

６は、沈線のかわりに、微隆起線を巡したものとが、神奈川・東京・埼玉・千葉・茨城で両者の存在が確かめられている。このことは、同一の文様構成を有しながらも異なった表現方法をとる２者が同一地域内に存在していたことが知れるのであり、このことは、これら両者の関係が時間差あるいは個体差として処理されるべき可能性を有してくる（折原・1977）。

１は、東北系のもの。信濃および東海の連孤文のかわりに影響を与えてくると言えるものである。

11は、１と同様のことが言える。

10は、第３図－３と同類型で、関東地方各地に存在している。

７は、口縁直下に丸味を帯た隆帯がある。

以上、いくつかの土器を取りあげてみた。その結果、６・７は加曽利ＥⅢ式に組み入れることが可能である。１・11は加曽利ＥⅣ式に併行されるもの。11は、９・10の土器と供伴するものであり供伴関係からみて、同時期と同定しても差し支えないだろう。つまり加曽利ＥⅢ式で捉えていたすすき山遺跡出土の土器の、その大部分のものが、加曽利ＥⅣ式に組み入れることができるのである。

４．住居址群について

すすき山遺跡から検出された住居址は11基をかぞえる（表１）。これらはすべて舌状台地の基部に近い西半分に偏在し、中央鞍部をさけて、台地の縁辺部にのみ展開している。これらは、その床面直上の土器等によって加曽利ＥⅥ式期に属する（先に述べたように、すすき山遺跡出土の土器のほとんどが、加曽利ＥⅣ式期に属することがわかった）単純遺跡である。

千葉県における縄文時代中期終末期の遺跡は東京湾岸沿いの下総台地縁辺部に集中的に分布している。そして、これらの遺跡の中で、すすき山遺跡と同様に縄文時代中期終末期に至って集落が営まれ、しかも、この時期に限られるという遺跡事例が多い。鹿島前・金楠台・中野木新山・中囲護台・生谷境堀・江原台（第１を含む）等が掲げられ、こうした、中期終末期単純集落は、埼玉県域にみられる傾向である（山本1980）。

しかし、埼玉の場合、柄鏡形（敷石）住居へと変化を遂げている事例が多いのに対し、千葉県域では、わずかに金楠台２号住と江原台遺跡の３基が典型的な柄鏡形を呈しているだけで、一般的な住居形態のまま、集落が営まれている。その理由として山本氏は、中期末単純遺跡とは別に、中期終末期に集落が営まれ始め、後期へとうけつがれる集落、特に東京湾沿岸の下総台地縁辺部に縄文時代後期以降営まれる大規模な貝塚や集落、そうした母体が、この中期終末期の集落のありかたに求められるとし、中期以来の集落の多くは中期終末期に至って、地点をかえ、集落が営まれ始め、一部は後期へとうけつがれていったという、中期以来の集落からの脱脚、集落地の移動として、中期終末期が捉えられるとした。そして、「後期集落の発達は、南関東では、東京湾沿岸の下総台地縁辺域に顕著であり、この地域では、中期から後期への転換が、中期終末期を介して、比較的スムーズになされたものと理解される」とした。この中期終末期は一つの転換期ではあるが、集落の変遷上、この期を境として比較的スムースに後期集落へと移っていったということである。

すすき山の報文の中では、すすき山遺跡が立地する台地の東側の支谷においては、大型の貝塚が集中し、すすき山遺跡の立地する支谷においては比較的小型の貝塚しか存在しないのは、両支谷に貝類の繁殖はなく、ともに「よし川」の合流地域まで下らねばならない可能性が強いので、ただ単に自然条件によるものではなく、そこに当然ながら、当時の集落相互間の人為的な社会規制が存在したことが予想される。とし、また、加曽利貝塚と滑橋貝塚との関係をみると、加曽利貝塚の北貝塚でも南貝塚でも、加曽利ＥⅢ式期の貝層や住居址はほとんど確認できないのに、古山支谷をへだてた対岸にその時期の貝層を伴う住居址が存在している。すなわちこの時期の集落は、大型貝塚の内部に包含されるよりは、外部に孤立して別個に存在する可能性がある。と書かれている。

つまりこのことが、山本氏の言うところの、中

期以来の集落からの脱脚、集落地の移動として、中期終末期が捉えられるということになるのだろうか。そして、中期から後期への転換期がこの、中期終末期になるのだろうか。

すすき山遺跡は、前述したように11基の住居址が検出されている。報文では、床面上に貝層を伴うものが5基、重複するものが3基、含まれている。したがって、11基すべてが同時存在ではありえない。少なくとも2時期に分けられる。また、住居址の床面が、ソフトロームの上面までしか掘り込んでいない。周壁の立ち上がりも不明確で周溝をもたないものが多い。柱穴列が不規則で、床面は軟弱であまり踏み固められていない。等の特徴があり、これらのことから住居址内における生活の期間や、集落そのものの存続期間が永かったとは考えられない。

その他には、住居址内外における遺物の出土数が極端に少ないとあり、この集落が2時期に亘って営まれ、しかも短時期であった。ということが言われている。出土土器のところで述べたようにそれらは加曽利EⅢ式とEⅣ式に分けられるが、報文では全ての土器が載っておらず、また住居址出土の土器も同様に報告されていないので、土器をもってして住居址を2期（EⅢ期とEⅣ期）に分けることができなかった。

5．おわりに

縄文時代中期終末期になると、土器もそれまでの独自なものから斉一化の傾向になる。同じように今までの集落が廃絶され、新に集落が開始されるが、次代後期にまで続く集落もあれば、廃絶される集落もある。その一つがすすき山遺跡であった。この中期から後期へと移行する間には様々な問題がある。すすき山も、問題が多々ある遺跡であると思う。

全くまとまりのない文になってしまった。あらためて自分の勉強不足を感じている次第であるが先学諸賢のご批判をいただければ幸いである。

（千葉市教育委員会文化課）

〔脚　註〕

(1) 加曽利E式土器の終末をEⅢ式→EⅣ式と置くことについては、各研究者によってその認識の違いなどから様々な意見が提出されている。また堀越氏は、これらの混乱期の研究動向について、過去の諸説を研究史的に整理したうえで、いわゆる加曽利EⅢ式・EⅣ式が、EⅢ式として統合できるものである（堀越1972a・b・C）とした意見もある。

(2) ここでは、千葉県内から出土した土器を通して、その要素を取りあげてみたのであるがもちろん県外の出土土器との比較検討は必要である。土器型式の編年は、時間的にも地域的にも究極までおし進められなければならないのだから。

ここに取りあげた要素は、まだまだ説明不足であり、漠然とした感は否めないが、県内出土の土器から取りあげたという点をご諒承願いたい。

〈参考文献〉

(1) 後藤和民・庄司克「千葉市源町すすき山遺跡発掘調査概報」『貝塚博物館紀要』5号1972

(2) 折原繁「研究紀要」2　千葉県文化財センター（昭52）

(3) 白石浩之「加曽利E式土器の変遷」『考古学研究』25－1

(4) 中村・斉木他「千葉市中野僧御堂遺跡」千葉県文化財センター　1976

(5) 新藤康夫「加曽利E式土器細分の再検討」『考古学雑誌』62－3

(6) 今村啓爾「称名寺式土器の研究（上・下）」『考古学雑誌』63－1・2

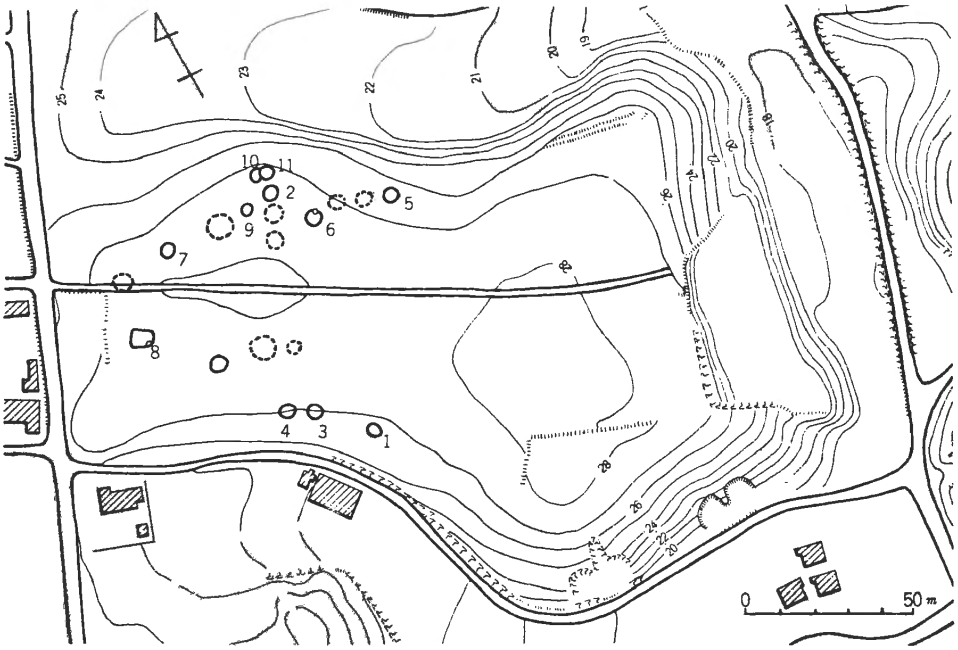
(7) 柿沼修平「加曽利E式土器終末の諸段階」『なわ』15号1 1977

(8) 柿沼修平「縄文時代中期の研究の流れ」『なわ』17号　1979

(9) 宮崎朝雄「加曽利E式土器について－埼玉県出土土器を中心として－」『なわ』17号 1979

(10) 小川和博「千葉県における縄文中期末の居住形態（予察）」『なわ』17号　1979

(11) 山本暉久「縄文時代中期終末期の集落」『神奈川考古』　9号　1980



第5図　千葉市すすき山遺跡の遺構分布図

No.	長径×短径（m）	柱穴（ロ）	周溝	炉址（cm）	伴出遺物	所属時期（式）	備考
1	4.6×3.6	4	局部	60×60	覆土中土器片（加EIII）	加曽利EIII	
2	5.7×5.7	4	未確認	90×70	覆土中土器片（加EIII）	加曽利EIII	貝層二カ所
3	5.3×4.7	7	全周	80×70	覆土中土器片（加EIII）	加曽利EIII	貝層二カ所
4	5.5×4.6	2	半周	70×55	覆土中土器片（加EIII）	加曽利EIII	貝層一カ所
5	5.0×4.5	6	なし	60×55	床面上土器1（加EIII）	加曽利EIII	貝層一カ所
6	4.5×4.3	8	なし	70×60	床面上土器3（加EIII）石鏃1	加曽利EIII	貯蔵穴一ケ
7	5.2×4.5	8	なし	（攪乱）	覆土中土器片（加EIII）	加曽利EIII	貯蔵穴と重複
8	6.7×6.0	10数ロ	なし	60×50	覆土中土器片（加EIII）	加曽利EIII	
9	4.0×3.6	不明	なし	65×45	覆土中土器片（加EIII）	加曽利EIII	貝層一カ所
10	5.5×4.5	5	なし	40×40	覆土中土器片（加EIII）	加曽利EIII	
11	5.0×4.5	不明	なし	50×50	床面上土器1（加EIII）	加曽利EIII	貯蔵穴二ケ

第1表　千葉市すすき山遺跡出土住居址一覧表